

空



2004年

**SORA** 5号

晴夜 (5) | 1

柴田佐知子

道掃いて峡の旗日や冬の鴉

虎落笛枕の中をいくたびも

キリストも使徒も同齡聖夜劇

凧や木白石白伏せしまま

山の日のもぐもぐあたる枇杷の花

鴨鍋やときをり夜気を入れながら

頬挟む両手がありて初山河

海割つて聖者の通る読始

## 鏡

高倉和子

虎落笛井戸の中より出てきたり

一山の枯れきつてゐる青空よ

白菜の断面笑ふほど白し

熟考に声を忘れし冬の夜

引き寄せし鏡の中に風邪の顔

黒髪の水に触れたる寒さかな



母のこと雪の白さにたとへけり

言ひ訳も理屈も許し蜜柑むく

身の軽くなりて焚火を離れたり

ふるさとに居れば娘や福寿草

恐ろしき様に溶けゆく雪達磨

手袋の右手大きくなりけり

声にしてみるのみのこと遠火事は

麦の芽や働く父は大きかり

うしろより見られし山の笑ひけり

ふるさとに帰ると朝、父と散歩をする。

一年に二、三度しか帰らないので、ふるさとの景色がその度になつかしくもあり又、新鮮でもある。最近膝が痛むという父だが、今も田や畑仕事をしているせいか健脚である。私はいつも父のあとを急ぎ足でついていかなければならない。正面に連なる耳納の山を見ながら、今日の天気のことなど時々話しながら歩いていく。私にとってかけがえのない時間である。

## 帰山式

高 千夏子

短日や端赤く出しファックス紙

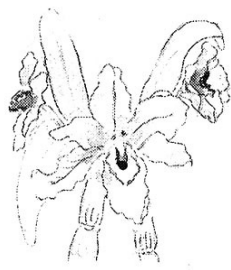
鉄棒で出来し胼胝見す小春風

綿虫やあめつちなんとたよりなし

出初式一翔もなき青空に

宿痢飼ひ馴らし三寒四温かな

問はず語りに医師の病歴冬ぬくし



乳がんの手術後、「保護観察」で二週間に一度通院。院長に診て頂くうち三分ほどの診察の間、断片的だが文学等も話題として下さる。他分野にもご精通の国手である。先日、「鈴木虎雄の書を骨董屋で買った」と仰る。鈴木虎雄は中国文学者とお教え頂き早速調べたところ、吉川幸次郎の師で文化勲章受賞者。しかも何と正岡子規の弟子で短歌や詩も詠んだとある。夏目漱石は番外として、歌人の伊藤左千夫も、会津八一も子規門。改めて、正岡子規の偉大さを思った。

しかしである。先頃、猪瀬直樹氏から近著「道路の権力」の恵送を受けた。道路公団民営化の成果の程はともかくとして、本の最後近くに、日本の言論人はり

最澄の空海嫌ひ龍の玉

色足袋にして商談をかたくなに

またゝかぬ日向に咲きて臘梅は

寒泳の筋骨顕ちて戻りけり

ペンは剣より強しとされど海鼠かな

雪吊の縄黄ばみたる帰山式

きさらぎの「面影橋」に用のあり

丈草忌重しをかくる花菜漬

アリズムを嫌うと書かれ、司馬遼太郎の言が引用されている。「明治のリアリズムは、子規の写生主義を生んだことで文化としては大きな収穫があるが、それは借家は間口何間で玄関で玄関は明るい暗いか、庭には鶏頭が何本あるか瓶の藤の花房は畳の上に届いているかどうか、というリアリズムで、次の大正時代の思想的基盤に成るほどの力ではなかった」という文だが、病躰六尺の子規に多く期待し過ぎである。

直樹氏は「ペンは剣よりも強しという西洋の箴言は、権力を射程に置くこと、ターゲットとして精密にとらえること、つまり剣について詳細に知悉することから始めないと成り立たない、そうしたリアリズムを前提にしている」とご自身を書いている。

俳句でも少数だがそういう人はいる。故人では三橋敏雄。今でも気を吐いているのは、鈴木六林男あたりか……。子規没後、百年過ぎた。現況はトリビアルな作品が、俳壇を横行する。心を引き締めて句作したいものだ。

# 太 箸

小林 朱夏

鯛のあと兜山ゆくくんちかな

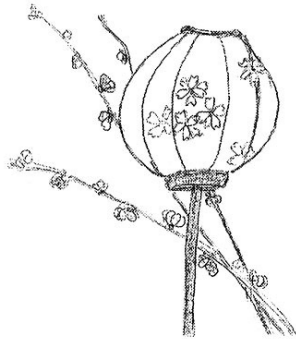
朝霧か冬の棚田を降りてゆく

十手歩くどこも枯れたる音ばかり

箒もて焚火に空気入れてをり

大根干す葉のなきものは横にして

鶏冠の色の変はりて雪の舞ふ





眉と口真一文字に雪達磨

消防車そのけそこのけ火の粉舞ふ

眼を病みて夢鮮やかな霜夜かな

太箸に亡き父の指見てをりし

福寿草佳き名に応へひらきけり

人体に不要物なし初湯殿

手を打てば底より浮ぶ寒の鯉

正直に吐露する一句水温む

ふるさとは親あるところ桃の花

女の時代といわれて久しいが、心技体全  
てにおいてそうかと考えると、私の身近に  
いる男衆（六十代、二十代そして二才児）  
女衆（五十代、二十代）に限り、どうも深  
く静かに充電中で虎視眈眈と復権の機会を  
窺っている様子が前者に見とれる。

この正月に風邪を引き、胃腸の具合が悪  
く、眼病を患い病院に行ったのは女衆であ  
る。娘の夫は元気に仕事に励んでいるし、  
私の夫は孫と落葉を集めてはご近所の迷惑  
も考えず、焚き火をしている。不器用で無  
口な夫が二才児相手に悪戦苦闘しているの  
を、私と娘はガラス越しに笑いながら餅を  
食べている。

## 父の部屋

里中章子

存分に炎の色立ちしとんどかな

闘はず冬の水母は沈みけり

父母のなき日の暮れや手鞠唄

音なくて朝は濁らず厚氷

地境は崖となりけり大寒波

寒昴暮れてしまひし杜騒ぐ



雪飛ぶや張りどほしなる舳ひ綱

草草や日の当りある冬の波

白妙の枕の上の遅日かな

切山椒暮色の街へ溶け込めり

冬の蠅ぬくぬくとみて悪びれず

水底の沢庵石や寒明くる

なやらひや父居ぬ部屋をあかあかと

雫して大き廟や椿餅

ほろと身の離れし魚や春深し

大寒に入ってから寒波は久しぶりに福岡に大雪を降らせた。

私にとって今年の雪は、父母を失ってただ一人地上に立つという思いをひと感じさせるものがあつたが、それでもガラス細工のような樹々の細部の雪、ビル群をたき上がらせる夜の風花、港の飛雪など、みな厳しくも美しく見え、何とかそれを表現したいと思つた。俳句があればこそことであろう。

最近、《人は言い訳をせず堪えて、黙つて自分の内に自分を愛しみ育てていかなければならない。(これは辻田克巳氏の言葉だという)》と言う山西雅子氏文に出会つた。俳句とはまさにそういう文芸であろう。父母のいない今、そのことが改めて心の底に沁みだ。



空作品Ⅱ 柴田佐知子選

初神楽出を待つ鬼めすこし酔ひ 橋本五月

川霧の重しと言へり渡舟守

若水を陸で汲み来し舁妻

突つ張りし脚より白鳥着水す

この路地で死ぬ顔ばかり日向ぼこ

厄落し恋まで落としてしまひけり

二月礼者赤子を抱いて来たりけり